SHURIJO CASTLE PARK NEWS LETTER UGUSHIKUDAYORI
首里城通信 Vol. 16 冬号

# 御城だより

2023
1

首里城復興ボランティア
木材倉庫壁面グラフィック
泡盛古酒の魅力を世界へ！
琉球・沖縄の食文化
調査・研究について

## 令和の首里城の姿を求めて

### 首里城復元に向けた技術検討委員インタビュー

# 令和の首里城の姿を求めて ～首里城復元インタビュー～

沖縄県立博物館・美術館館長
田名（だな） 真之（まさゆき）氏

**令和8年秋には正殿復元の完成が予定されています。「首里城復元に向けた技術検討委員会」の委員でもある田名真之氏に、令和の首里城への想いを伺いました。**

**田名館長が歴史家として考える、琉球史の中における首里城の位置と重要性について教えてください。また、首里城を復元する意義についてどのようにお考えですか？**

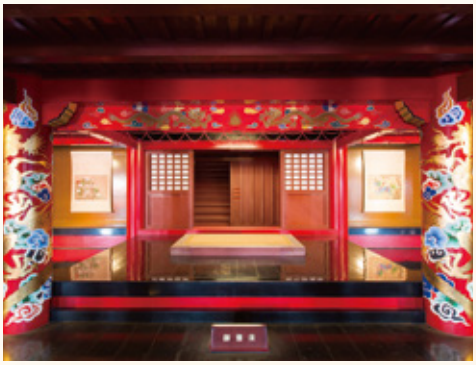
## 「歴史の結節点にはいつも首里城が中心にあった」

沖縄の歴史を考えていく上で首里城を一言で表すと、首里城は「歴史の現場」であったと言えると思います。約450年間にわたり琉球王国で起こった様々な出来事は、首里城を舞台に行われてきました。国王の居城として、政治・外交の舞台として、薩摩の侵攻や琉球処分の時も沖縄（琉球）の中心であるという首里城だからこそ、そういうことが行われてきました。また、文化面においても琉球王国時代に育まれた食文化や芸能に首里城が大きく関わっています。

他にも沖縄戦で爆弾が落とされて消失したことも大変象徴的な出来事だったと思います。このような意味で首里城は歴史的な現場として第一級です。歴史の転換点というか結節点には、いつも首里城が中心にあったと言えます。

そして、この首里城の復元を通して、歴史的事実を再確認できることもあります。様々なことが行われた歴史現場（＝首里城）の再現というのは大変意義深いことだと考えています。さらに、そこで何が行われたのか、往時の人々のいろんな動きや生活もあり、政治も行われ、踊りや音楽も含め様々な芸能が催された歴史があります。その中で琉球文化が醸成されていった、そこに一番の意味があるのだろうと思っています。

**首里城の色、赤い漆で塗られていてとても印象的です。**



## 「首里城は仏教の影響を大きく受けていた」

首里城は中国や朝鮮の影響が大きいのではないでしょうか。それと日本の中世の一つとして神社など赤い建築の流れでもあったと考えられます。だから、いわゆる日本のお城とは違う系統の建築の世界が琉球では取り入れられているということになるでしょう。宗教施設みたいな感じで、首里城はどちらかというと仏教的な世界ですからお寺みたいな作りでしょう。正殿の前に「万国津梁の鐘」を掲げていたという記録もあります。古琉球の英祖の時代から仏教は入っていて、第一尚氏の時代でも入っています。その前からお寺はあるので、首里は本当に18～19世紀くらいになると寺だらけです。寺町みたいにあちこちに寺ばかりありました。意外とその痕跡がなくなってしまっていますが、沖縄県立博物館・美術館に集まっている鐘だけでもすごい数があります。結構、仏教の世界というのも古琉球から繋がっていて、それが建築にも影響を与えた可能性はあると思います。

## 「首里城は天守閣のないお城」

その他にも首里城には日本的な城に見られる天守閣はありません。天守閣は基本的には戦争がないと意味がない要塞のようなものですから。沖縄の城は、アジアの他の城と同じような形で宮殿とセットになっています。日本本土の城を見てきた人からすると沖縄の城は全然違うことになるわけです。でも、城壁を構えているので防御能力は持ってはいます。首里城は高台に位置し、二重三重に城壁が周っているので、防御という意味でも優れた城ではあると思います。

首里城は建築技術や美術工芸的な世界も含めて、当時の琉球王国の最高水準の技術をもって作られています。王国の最高技術が注がれ、磨かれたということになります。日本からも中国からも人が来る中で、いかに首里城を立派に作り上げていくかを常に研究しながら取り組んでいます。木造建築ですので、50～60年に1回大きな修理、20～30年に1回ぐらい小さな修理をしないといけないので、そうやって常に新たに甦るという作業をずっと続けてきたということです。それによって新しい知見や工夫も蓄積されてきただろうと思います。

## 「令和の首里城復元」と「平成の首里城復元」で違うところはどのようなところでしょうか？

### 「南殿大広間の復元」

技術検討委員会の中で基本的な再建方針は決まりましたが、平成の首里城との大きな違いは首里城南殿の大広間が復元される点だと思います。南殿の大広間は使い道が広くて、王国時代は節句や八朔（はっさく）などの日本風の行事が行われ、薩摩の在番奉行の接待にも使われていました。中国に派遣される使節団が出発前に壮行会を開いてオトーリ（大通）みたいなことをやっていたという記録も残っています。私は、ぜひ復元される南殿の大広間を有効活用して欲しいと思っています。平成の首里城では実現できなかった屋内イベントが、この大広間で再現できるようになりますし、多くの方々にいろんな形で使っていただけるだろうと期待しております。

舞楽図【（一財）沖縄美ら島財団所蔵】写真は江戸の薩摩屋敷での席書・呈茶・御座楽の様子

## なぜ平成の首里城では南殿の大広間は復元されなかったのですか？

当時は南殿を復元するための資料が乏しかったことが一番の要因です。南殿に大広間が畳敷きであったことまではわかってはいましたが、間取りを含めてどれぐらいの広さだったのか具体的にはよくわかっていませんでした。この30年間に少しずつ史料や写真が出てきて、史料がある程度集まって材料が増えてきたので、南殿は少しでも往時に戻す可能性があるのではないかという検討がなされ、ではその方向で考えましょうかということで進めているところです。

## 館長はこの大広間でどのようなイベントの開催（再現）を望みますか？

やはり今後一番復元の可能性があるのは踊りだと思います。歌舞音曲というか、三線を含めて芸能などを披露したという記録が残っています。（組踊の創始者である）玉城朝薫がそこで踊ったという記録はないけれども、朝薫が日本舞踊や能に繋がるような踊りをしていますでしょう。少なくとも朝薫の孫が踊った時には、場所が南殿だったという記録があります。南殿というのは、そういうことができる素晴らしい場所だったのです。

琉球人舞楽の図【（一財）沖縄美ら島財団所蔵】

大広間が復元した暁には例えば、人間国宝の方々に、年に1回踊りを披露してもらうような場を作るとか、踊りや音楽の世界で最高賞を受賞した人にお祝いの場として披露していただくと、距離が近くなり目線も違う、舞台上の公演とは全然違うものになると思います。往時の人たちがどういう形でその芸能を鑑賞していたのかということも含めていろんな体験をしてもらいたいです。大きな舞台でやることとは全然違い、こういう芸能を観るという経験はまた一味違うものになります。そういうことが企画できると、やる人も観る人にとっても大きなメリットになるので、良いものになるかなという気はしています。

## 最後に令和の首里城がさらに県民に親しまれるために必要なことは何でしょうか？また、首里城復元に込める想いを改めてお聞かせください。

世界遺産 正殿基壇遺構

繰り返しになりますが、「南殿の活用」がキーポイントになると思います。南殿の大広間では様々な試みが可能になるだろうし、そこで定期的に県民参加型のイベントを行う―。そうすることで県民のリピーター増につながると思います。そのための仕掛けをどう作っていくかということが大きな課題になるでしょう。ぜひ、実現に向けて追究して欲しいです。

空から見た首里城復元現場の様子

令和の復元で立派なのを作りますが、それだけではなく、首里城を巡る様々な歴史的なものも含めて、首里城に少し深入りすれば、まだまだ解明しなくてはいけない謎がたくさんあります。正殿基壇遺構を今回は2ヶ所見せようとしています。基壇はいくつもありますが、いつの時代と特定できていない。研究という意味では結構残っていて、作ったら終わりではない。我々はその首里城の全体を明らかにするという意味ではきちんと追究していく必要もあります。

首里城が復元されたら、そこで何かやることによって、かつての首里城が蘇ることにもなるし、研究のしがいもあります。また若い人たちでそういうことを受け継ぐ人が輩出される大きなきっかけにもなります。首里城の歴史も改めて見直すことになるので、ぜひそれは美術工芸と建物だけではなく、**歴史の豊かさも含めて本当に歴史の現場だったということを感じてもらえたらと思います。**

**復元を頑張っていきますので皆さんぜひ楽しみにしていてください！**

首里城解説員が行く！

# 首里城復興ボランティア ニービの粉 製作を体験してきました！

首里城 うるし塗り原料

「首里城正殿赤瓦の漆喰はがし」「首里城正殿赤瓦のシャモット製作」に続く第3弾となる首里城復興ボランティア「首里城 うるし塗り原料“ニービの粉”製作」が令和5年1月13日から始まりました。

火災により焼失した首里城正殿の柱を支えていた「礎石（細粒砂岩）」を再利用し、これから復元される首里城正殿などの、柱や壁面等の朱色の「うるし塗りの原料に用いるニービ（細粒砂岩）の粉」を製作するボランティアです。首里城解説員が一足先に体験してきました！

## ニービって何？

ニービとは、細かい粒からなる砂層を指す沖縄の方言です。ニービからとれるニービ土はこれまでも正殿等のうるし塗りの原料として用いられてきました。また、ニービが凝固した固い部分がニービヌフニ（ニービの骨。細粒砂岩）として正殿の礎石等に用いられております。

今回の正殿復元においては、ボランティアで製作したニービの粉を、ニービ土に混ぜ合わせてうるし塗りの原料として使用します。

## 1 礎石の破片

火災により破損してしまった礎石の破片が入ったコップを受け取ります。

## 2 道具を使って砕く

道具を使って、細かく砕いていきます。しかし、思うように砕けません…(-_-;)。想像以上に固い!!
私が悪戦苦闘している姿を見て、スタッフから「全体的に叩くのではなく、破片を絞って、まずは1個ずつ叩いてみてください」とアドバイスをいただきました！

欲張らずに1個ずつ「コツコツ」叩くことで、私の力でも難なく潰せました。

## 3 さらに細かく！

ある程度細かくなったら、体重を乗せて「グリグリ」とすり潰します。

## 4 完成！

砂のような粉末状になったら“ニービの粉”が完成です！刷毛で集めてカップに戻します

## 5 参加証授与

終了後は受付で記念となる「ボランティア参加証」をいただきました☆

**★感想★**
正殿復元工事に直接参加できたという嬉しさと達成感で胸がいっぱいになりました！

## 「首里城 うるし塗り原料“ニービの粉”製作ボランティア」 参加無料

**期間** 令和5年1月13日（金）～3月10日（金）[ 30分程度/回 ]
**時間** 9:00～16:00（15:30最終受付）
**場所** 首里城公園内 下之御庭（しちゃのうなー）
首里森御嶽（すいむいうたき）周辺（無料区域エリア）

**受付** 当日随時受付
**対象** 小学5年生以上の方
ご参加いただいた方には終了後「ボランティア参加証」を差し上げます。
※詳しくは首里城公園HPをご覧ください

# 首里城正殿グラフィックが完成!

## ～見せる復興の新たな見学スポット～

木材倉庫・加工場

**首里城の奉神門をくぐると見えてくる正殿を描いたグラフィック。令和4年12月に完成し、フォトスポットとして注目を集めていますが、驚くほど緻密に描かれていてまるでそこに正殿があるかのようです。内閣府 沖縄総合事務局の担当者にお話を伺いました。**

内閣府 沖縄総合事務局
国営沖縄記念公園事務所 首里出張所
建設監督官
小野（オノ）悟（サトル）氏

### 壁面に正殿のグラフィックを施す発想に驚きました！

木材倉庫が完成し復興が一歩ずつ進んでいることを感じていただくことが出来ると思いますが、令和8年の正殿完成まではまだ長い時間がかかります。その間も来園された方々に楽しんでいただきたく、「見せる復興」の一環として首里城正殿のグラフィックを描くことにしました。

奉神門の中央口を通過すると木材倉庫の壁面が現れます。そこに正殿を中心とした北殿や南殿を含めた御庭全体の空間を描くことにより、来園されたお客様に新たな見学スポットを提供できるのではと思い施工しました。

### 木材の搬入口上部の凸面が目立たないのは見事ですね！

在りし日の首里城正殿は、実は奉神門中央口からまっすぐの位置にはなく、少しずれた位置に正殿の正面があります。この位置関係を踏まえて御庭空間を演出するための見え方、描き方等の全体のバランスに苦労しました。

また、資機材搬出入口用の大きな庇（ひさし）があるうえ、壁の凹凸や窓ガラスがあり絵が描けない箇所もありますので、絵描き職人とどのように描けばよいか何度も打合せを行いました。（絵描き職人の皆様、関係者の皆様、ありがとうございました。）

### 来園者へのメッセージをお願いします

首里城正殿とはどの様な建物だったのかご存じない来園者もいると思います。今回、迫力のある素晴らしいグラフィックが出来上がりましたので、このグラフィックを見て復元される正殿をイメージしていただき、是非、正殿完成後に改めて来園して実物を見ていただければと思います。

今回の復元では「見せる復興」をテーマに掲げて取り組んでいます。復元工事が着実に進んで、日々、現場の状況も変わっていきます。木材倉庫の壁面グラフィックも含め、今しか見ることが出来ない工事内容や展示等がございますので、**ぜひ何度も足を運んでいただき「今の首里城」を見ていただければと思います。**

# 泡盛古酒（くーす）の魅力を世界へ！

## 「琉球泡盛の粋 in 首里杜館」を開催！

琉球泡盛の普及啓発と消費拡大を目的に令和4年12月17日・18日の2日間、首里杜館で「琉球泡盛の粋 in 首里杜館」を開催しました。

泡盛古酒ボトルオークションをはじめ、泡盛飲み比べ体験会、パネル展、泡盛の女王ミニトーク、泡盛モデル三線の展示など泡盛に関する様々なプログラムを実施し、参加者には琉球泡盛の魅力にどっぷり浸かっていただきました。

## 首里城と泡盛の深～いつながり

琉球王国時代、首里の鳥堀、赤田、崎山の「首里三箇（さんか）」のみに製造を許された泡盛は、首里城に納められ、城郭北側にある「銭蔵」で管理されました。

泡盛は首里城の重要な儀式や年中行事に欠かせないものであり、中国からの冊封使などの接待用として振る舞われたほか、江戸や薩摩への献上品や貿易品としても用いられ、一般の人びとが滅多に口にすることができない貴重なものでした。このような歴史背景からも泡盛を語る上で首里城は欠かせません。

## 熱気に包まれた「泡盛古酒ボトルオークション

メインイベントとなる泡盛古酒ボトルオークションは、ご家庭に眠っている・大切に保管されている泡盛古酒ボトルを公募し、オークション形式で、飲んでみたい方や収集したい方と繋げることで、古酒の価値を高め、流通の活性化に貢献するために企画しました。

また、オークションでは出品または落札した参加者が、楽しみながら首里城復興に参画する取り組みとして、落札額の一部を首里城基金に寄付いたしました。オークション当日は県内外から46人が参加し、貴重な古酒ボトルを求めて入札額を競い、会場は熱気に包まれました！

## オークション終了後は、泡盛飲み比べ体験会を実施

古酒（くーす）の味を楽しみながら、泡盛について語り合う空間を創出しました。

泡盛モデル三線の展示の前で記念撮影。

泡盛の歴史を学べる、泡盛パネル展。

## 「首里城復興祈願 泡盛一石甕」も展示しました！（場所：首里杜館1F）

昨年（令和4年）12月17日、沖縄県内4つの企業・団体より、一石甕、琉球泡盛、琉球石灰岩製の台座、甕の蓋を覆う琉球びんがたの一式が、首里城復興の願いを込めて首里城公園に寄贈されました。

同日、関係者や一般来園者の皆様で、一石甕の中に県内酒造メーカー45社の泡盛（一升瓶90本）が注がれました。令和8年の首里城正殿完成のあかつきには、この一石甕の蓋を開けて熟成がすすんだ泡盛を来園者に振る舞う予定です。

# 琉球・沖縄の食文化調査・研究について

トウンダーボン
東道盆

ほかにも琉球王国時代や沖縄の食文化に関する資料や先行研究を収集し、琉球料理の普及啓発に活用しています。令和3年度には沖縄県の事業として「**沖縄県食文化データベース**」を制作し、Web上で一般公開しました。

また、沖縄県が平成28年度から実施している「琉球料理伝承者養成事業」において「**琉球料理担い手育成講座**」へ講師を派遣しました。首里城公園の「レストラン首里杜（すいむい）」では育成講座から輩出された琉球料理伝承人2名が腕を振るっており、伝承人監修の限定メニュー「首里杜御膳」は伝統的な琉球料理を楽しむことが出来ます。首里城公園イベント「琉球菓子作り体験」でも様々な琉球菓子の解説を行っています。今後も首里城公園や伝承人と連携し、王国時代から伝わる琉球料理や琉球菓子の調査研究の成果を普及啓発していきます。

## レストラン首里杜「首里杜御膳」

伝承人監修の
限定メニュー
「首里杜御膳」
1,700円（税込）

（一財）沖縄美ら島財団　総合研究センターの琉球文化財研究室では、琉球・沖縄の食文化に関する調査研究をしています。琉球王国時代から受け継がれている伝統的な琉球料理を再現している老舗料亭「琉球料理　美榮（みえ）」（1958年創業）の料理の記録保存は重要で、下ごしらえから調理、琉球漆器や壺屋焼の器に盛りつけた完成までの工程を動画と写真で撮影し、併せて材料と調味料の分量の計量、作業工程時間を計測します。創業から60余年経つ「琉球料理　美榮」の伝統料理は、このように客観的なデータとして保存されます。

琉球料理を再現している様子を記録保存

**「ミヌダル」**

豚肉料理。薄切りにした豚肉の肩ロースを擂（す）った黒胡麻のタレをまぶして蒸しあげたもの。ミヌダルという料理名は、蓑（みの）を着たような見え方から付いたと言われています。東道盆に入れられたり、「祝膳の一品、清明祭料理、酒の肴」になる料理です。

「沖縄県食文化データベース」ホームページより

～沖縄の世界遺産５城を巡る旅へ～

# 世界遺産 琉球王国のグスク コラボ御城印

各城跡で販売中！

首里城を始めとする、世界遺産に登録されている５城がコラボレーションして5枚の御城印を制作しました。
全て揃うと絵巻物のようにそれぞれの城の繋がりや物語を楽しむことができます。
各城跡を訪れると数百年前に築かれた城壁や遺構が残されており、往時に想いを馳せるひと時にもなるでしょう。
琉球王国時代の歴史や文化を体感する世界遺産5城を巡る旅へ出かけてみませんか。

中城城は標高約160ｍの丘陵上に立地し、6つの郭で構成され3種類の石積みを見ることができます。15世紀中頃には今の形になり、約7割が築城当時の石と言われており、19世紀に訪れたペリー探検隊も築城技術を賞賛しました。最後の城主護佐丸は「護佐丸伝説」で語り継がれています。

今帰仁城は北山王の居城となったグスクで、発掘調査の成果から1200年代後半頃に築城がはじまり、1400年代前半に尚巴志によって攻め滅ぼされました。沖縄県内の多くのグスクでみられるような琉球石灰岩と違い、硬質の古期石灰岩を用いた雄大な石垣が良く残っています。

首里城は、1429年から1879年までの450年にわたり存在した琉球王国の政治・文化・外交の中心であり、沖縄の歴史・文化を象徴する城です。15世紀初期に築城されたと言われる首里城の歴史は、琉球王国の歴史そのものです。2019年の火災を乗り越え、2026年秋の「正殿復元」を目指し「見せる復興」をテーマとして復元現場を一般公開しています。

地方の有力城主の阿麻和利（あまわり）の居城として有名な勝連城は、自然の断崖を利用した難攻不落の城として有名で、優雅な曲線を描く城壁は、芸術的な美しさを感じさせます。頂上に登るとコバルトブルーに輝く太平洋が一望できる景勝地です。

## コラボ御城印「首里城跡」

デザインは琉球史イラストレーターの和々氏、筆耕は新垣雅之氏が手がけ、台紙には県産月桃紙を使用しています。
１枚500円（税込）

座喜味城は15世紀初頭、築城の名人と言われた読谷山按司護佐丸によって築かれたと言われています。標高120ｍ余の丘陵地に立地しており、二つの郭で構成される城壁にはアーチの石門が造られ、重厚で美しい曲線を生かし「天然の劇場」として活用されています。

世界遺産5城連携事業　一般財団法人 沖縄美ら島財団　一般社団法人 中城村観光協会　一般社団法人 うるま市観光物産協会　一般社団法人 読谷村観光協会　一般社団法人 今帰仁村観光協会


首里城通信
御城だより Vol.16
冬号 季刊誌

首里城公園HP

［発行日］2023年1月31日　［編集・発行］一般財団法人 沖縄美ら島財団　https://oki-park.jp/shurijo/　［表　紙］孫億『花鳥図』（康熙36（1697）年）【（一財）沖縄美ら島財団所蔵】